

## 「心の四季」歌うにあたって その4

### 1. 「風が」

組曲の題名のとおり、春夏秋冬が人の心を揺さぶりながら展開される。本来美しい季節の移ろいを並べるのが常套なのに、派手さや華やかさは無く、むしろ辛く厳しい歌詞が並ぶ。そして人はそれにどう対峙しているのかを厳しく投げかけてくる。

「桜の花びらを散らす」のを「春がそれだけ弱まってくる」と解く。

「夏が…輝きを増す」のに「内に床しい味わいを湛え」と控えめだ。

「雨が銀杏の金の葉を落とす」のを「…レースの糸を抜かれて」と例える。

「雪がすべてを真白に包む」のを「冬がそれだけ汚れやすくなる」と言い切る。

吉野弘しか発することのできないこの感性に、作曲者は先ず“強弱”で応えた。とにかく *f* (フォルテ) を使わない。しかしここで普通の団体は取り違える。概ね、派手さのないやや後ろ向きな歌詞を弱く感じて、弱々しく美しく演奏しようとするが、果たしてそれは正解か。

幼少の頃から雪の厳しさを知り尽くし『生かされて在る』を信条に 2014 年までの一生を駆け抜け、突き詰めてきた彼の詩を、*p* (ピアノ) で弱く演奏してほしいと高田三郎は考えただろうか。むしろ生きている証を強い言葉の力で音楽にしたかったのではないだろうか。*ppp* (ピアニッシモ) でさえも力強く伝えたかったのではなかろうか。そして、生きている強いエネルギーを季節の移ろいに感じて欲しかったのではなかろうか。

秋の後半に歌詞がないのは何故だろうかと気になる…。金の葉が落ちていく様子がまるでレースを抜かれていくようなシーンについて言葉を失ったか…と言えば芸術的だが、これは推測であるけれども、本当は適切な言葉が見つからなかったからではないかと思う。

『人は』(若しくは『私は』)で閉じる一文は、それぞれの季節の最初の一文に呼応している。『花びらを散らす』が『吹かれている』に、『頬をみがく』が『みがかれている』、そして冬は『真白に包む』が『包まれている』という具合に。しかし秋の『金の葉を落とす』に呼応する一文は見つからなかった。それは、人生を前向きに生きる上で『落とす(落ちる)』イメージが彼に無かったから、と推測できる。だから、作曲者はそれをピアノの美しい旋律に託した。

もう一つ。何故、冬では『人は』でなく『私は』なのか。これは吉野弘自身を指している。彼しか分からない雪の白さ、雪の激しさ、重さ。それらに包まれて生きてそう感じてきた彼にしか知り得ない、しかしそれでも『私』を厳しく優しく包んでくれた冬(=雪)への讃辞。それは彼だけの心の中の宝物なのである。

T.Ozaki

2017/05/20

2 曲目以降はまた次回に。